

武蔵野音楽大学

音楽総合学科 アートマネジメントコース

年間活動報告書 2024



*Annual Report of
the Department of Arts Management, Faculty of Music,
Musashino Academia Musicae
April 2024- March 2025*

目次

『年間活動報告書』2024 刊行に寄せて.....	1
1. 2024 年度 アートマネジメントコースの主な年間活動記録.....	2
2. 2024 年度 アートマネジメントコース専門科目一覧.....	2
3. 2024 年度 「アートマネジメント研究」各科目.....	3
■「アートマネジメント研究（基礎）Ⅰ・Ⅱ」.....	3
■「アートマネジメント研究（応用）Ⅰ・Ⅱ」.....	3
■「アートマネジメント研究（応用）Ⅲ・Ⅳ」.....	3
■「アートマネジメント研究（応用）Ⅴ・Ⅵ」.....	4
■2024 年度 卒業論文題目一覧.....	5
■2024 年度 卒業研究発表会.....	6
4. 2024 年度 実習活動.....	7
1)「アートマネジメント実習Ⅰ・Ⅱ」.....	7
2)「アートマネジメント実習Ⅲ」.....	10
3) 芸術文化施設見学実習.....	11
5. 各科目からの報告.....	24
「企画制作演習Ⅰ・Ⅱ」.....	24
「舞台技術概論Ⅰ・Ⅱ」.....	27
「広報宣伝資料製作」.....	28
「劇場音響概論Ⅰ・Ⅱ」.....	30
「芸術文化政策論Ⅰ・Ⅱ」.....	31
「コンピュータ音楽実習Ⅰ、Ⅱ」.....	32
「演劇論・演出論」.....	34
「舞踊概論Ⅰ・Ⅱ」.....	35
6. その他.....	36
1) FD活動.....	36

凡例：

- ・本報告書は、音楽総合学科アートマネジメントコースの授業、実習、その他の活動を紹介するものである。
- ・本報告書で記載されている教員の役職名、学生の年次などは、すべて2024年度時点のものである。
- ・特定の執筆者名が記載されていないテキストは、本号編集担当者が作成したものである。

『年間活動報告書』2024 刊行に寄せて

アートマネジメントコース長 上村英郷

2024 年は、年明け早々に石川県能登半島地震、羽田空港での地上衝突事故、北九州での火災、そして秋葉原での殺傷事件と、立て続けに災害や事故が発生し、不安な幕開けとなりました。一方で、パリオリンピック・パラリンピックにおける日本人選手の活躍や、米大リーグでの大谷翔平選手の歴史的快挙など、明るい話題も多くありました。

国際社会では、ウクライナ侵攻の長期化や中東地域での衝突の再発により、不安定化が進み、日本経済も物価高や急激な円安の影響を受け、先行きが見通しにくい状況となっています。さらに、少子高齢化の進行により、社会全体の未来への不安も高まっています。

しかしながら、「人生 100 年時代」と言われる現代において、健康で豊かな生活を送りたいという願いは、ますます多くの人々に共通する思いとなっています。いかに健康でいきいきと、そして美しく歳を重ねていくかは、現代社会における大きなテーマです。こうした時代の中で、アートマネジメントコースは、音楽や芸術文化を通じて社会に貢献する姿勢を持ち、学生とともに素敵で豊かな暮らしを考え、創り、広げていきたいと考えています。

私たちのアートマネジメントコースは、芸術的感性とマネジメント能力を幅広く修得することを目的としています。音楽に関する専門的知識や音楽実技の基礎に加え、舞台技術を含む劇場・ホール運営、演劇・舞踊などの舞台芸術、美術、文化政策、芸術関連の法制度について学ぶほか、コンピュータによる音楽制作、グラフィックデザイン、文書作成など、多岐にわたる内容を学修します。専門性の高い講師陣による多彩な授業を通じて、自身の強みや適性を伸ばし、将来の目標を明確にすることができます。また、学内外での実習を通じて実践的な経験を積み、高い芸術的感性と優れたマネジメント能力を養い、音楽や舞台芸術、音楽文化産業の発展に貢献できる人材の育成を目指しています。

特に今年度は、感染症拡大の影響で中断を余儀なくされていた「芸術文化施設見学実習」を再開できたことが、大きな成果となりました。本実習は、劇場・ホール、美術館、博物館などを訪問する 1 泊 2 日の見学実習旅行であり、全学年の学生にとって非常に貴重な体験となりました。実地での見学は、学生の学びに深い影響を与え、事前学習や事後のレポートと組み合わせることで、授業外での学習体験として重要な役割を果たしています。

これらの幅広い授業や実習は、すべて人との関わりを大切にし、アートマネジメントと深く結びついています。私たちは、芸術文化を通じて人々の生活を豊かにし、希望に満ちた未来の実現に向けて歩み続けます。

本報告書は、私たちアートマネジメントコースの教員が日々の教育・研究活動を振り返る手がかりとして、また、コースを支えてくださる皆様に教育の現状を報告するために編集・発行しています。皆様には、引き続きアートマネジメントコースへのご指導、ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

1. 2024 年度 アートマネジメントコースの主な年間活動記録

2024 年	
4 月 1 日	入学式
4 月 6 日	前期授業開始日
6 月 22 日～6 月 23 日	芸術文化施設見学実習
7 月 22 日	前期授業終了日
8 月 7 日～9 月 19 日	夏季休暇
9 月 20 日	後期授業開始日
11 月 1 日～3 日	ミュージックフェスティバル
12 月 6 日	「企画制作演習」公演（ブラームスホール）
12 月 23 日～1 月 5 日	冬季休暇
2025 年	
1 月 6 日	クラス授業・レッスン再開
1 月 20 日	卒業論文提出日
1 月 20 日	後期授業終了日
2 月 3 日	卒業研究発表会
3 月 15 日	令和 6 年度卒業式
3 月 23 日	3 コース合同卒業研究発表会（ブラームスホール）

2. 2024 年度 アートマネジメントコース専門科目一覧

科目	履修年次	担当教員
アートマネジメント研究（基礎）Ⅰ・Ⅱ	1 年	上村 英郷、赤木 舞、久保 仁志
アートマネジメント研究（応用）Ⅰ・Ⅱ	2 年	上村 英郷、赤木 舞
アートマネジメント研究（応用）Ⅲ・Ⅳ	3 年	上村 英郷、赤木 舞
アートマネジメント研究（応用）Ⅴ・Ⅵ	4 年	上村 英郷、赤木 舞、中川 俊宏、久保 仁志
アートマネジメント実習 Ⅰ・Ⅱ	2 年	赤木 舞
アートマネジメント実習 Ⅲ	3・4 年	赤木 舞
企画制作演習 Ⅰ・Ⅱ	4 年	中川 俊宏、赤木 舞
舞台技術概論 Ⅰ・Ⅱ	2 年	西田 俊郎
広報宣伝資料製作	2 年	松永 路
劇場音響概論 Ⅰ・Ⅱ	3 年	百合山真人、松宮辰太郎
芸術文化政策論 Ⅰ・Ⅱ	3 年	赤木 舞
コンピュータ音楽実習 Ⅰ・Ⅱ	3 年	安田 寿之
演劇論・演出論	4 年	酒井 美恵
舞踊概論 Ⅰ・Ⅱ	4 年	阿部 さとみ、稲田 奈緒美

3. 2024 年度「アートマネジメント研究」各科目

■「アートマネジメント研究（基礎）Ⅰ・Ⅱ」

授業概要:

今年度は、対面での授業を前期・後期ともに各 15 回の授業を実施した。授業は〈芸術文化環境概論〉を副題とし、芸術や文化の概念、音楽、演劇、舞踊、伝統芸能、大衆芸能などの舞台芸術分野や美術分野の状況、関連施設や団体の状況など、現代の芸術文化を取り巻く環境について講義を行った。学生はⅠ・Ⅱを通して、日本の芸術文化全般の現状を理解し、芸術文化を取り巻く環境に対する理解を深め、アートマネジメントの基盤を築くことを目指します。

担当教員:

赤木舞、久保仁志、と上村英郷の 3 名が担当した。主に赤木が各舞台芸術分野、久保が芸術全般と美術関係、上村が音楽分野を担当した。

授業形式:

アクティブ・ラーニングの一環として、毎回の授業の冒頭に公演見学レポートの発表を行った。クラシック音楽コンサートや未経験のジャンルの公演など、多様なレポート課題が設定されます。

評価方法:

前期・後期ともに Google フォームを用いたオンライン試験を行った。持ち込み可で時間内に解答する方式を採用し、語句の説明を求める問題などを出題した。試験結果は各教員が採点し、授業への取り組み姿勢なども考慮して最終的な評価が行われた。

学生が芸術文化に関する理解を深め、アートマネジメントの基盤を確立するための授業を提供します。
(上村)

■「アートマネジメント研究（応用）Ⅰ・Ⅱ」

授業概要:

今年度は、1 年間を通して対面で前期と後期それぞれに 15 回の授業を行った。授業内容は、「舞台芸術運営論」を副題とし、音楽をはじめとする舞台芸術公演の企画、予算管理、交渉、権利処理、契約、発注、宣伝、営業、事後処理などの制作業務全般に焦点を当てている。演奏会を中心に、企画立案から公演終了までの業務の流れを学び、音楽以外の舞台芸術全般についても、制作サイドからの視点で理解を深めます。

担当教員:

赤木舞と上村英郷の 2 名が担当した。主に赤木が各芸術各分野、上村が音楽分野を担当した。

授業形式:

アクティブ・ラーニングの一環として、毎回の授業の冒頭に公演見学レポートのプレゼンテーションを行った。また、学期末には企画書の作成とプレゼンテーションを行い、質疑応答や意見交換を行った。

評価方法:

学期末に発表した企画書のコンセプト、具体的な内容の整合性や充実度、授業への取り組み姿勢などが評価の対象となり、教員間で協議の上で採点した。各学生には教員からフィードバックが行われた。

学生が舞台芸術運営に関する実践的なスキルを身につけ、芸術とビジネスの両面で活躍できる準備ができるよう、精力的にサポートしていきます。
(上村)

■「アートマネジメント研究（応用）Ⅲ・Ⅳ」

授業概要:

今年度は対面での授業を行い、前期・後期ともに各 15 回の授業を実施した。授業は〈地域文化振興論・マーケティング論〉を副題とし、文化政策、文化施設、文化遺産、教育、民間支援、普及などの視点から芸術文化と地域活性化の問題に焦点を当てます。また、マーケティング理論も取り上げ、芸術文化と市場の関係性について学びます。前期・後期を通して、芸術文化と地域社会の関係を探究し、芸術文化の経済的側面にも触れることを目指します。

担当教員:

赤木舞と上村英郷の 2 名が担当した。主に赤木が芸術各分野、上村がマーケティング関連を担当した。

授業形式:

アクティブ・ラーニングの一環として、毎回の授業の冒頭に新聞記事やインターネット上で報じられた芸術文化関連ニュースのレポートを学生が発表した。学生たちが注目したニュースが共有され、質疑応答や意見交換が行われた。

課題と評価方法:

Ⅲ（前期）・Ⅳ（後期）では、各学生が 1 つの施設や団体を対象に研究を行った。前期末に概要調査レポートを提出し、後期には研究を深めて研究成果をまとめ、プレゼンテーションとレポート提出を行った。成績は研究内容の充実度や授業への取組み姿勢を考慮して評価された。後期に提出された研究レポートには教員からのフィードバックとともに、卒業研究に向けたアドバイスも提供された。

学生が地域と芸術文化の関係について深く探究し、実践的な研究を通じて学びを深めることができる授業を提供します。

（上村）

■「アートマネジメント研究（応用）Ⅴ・Ⅵ」

「卒業論文」

授業概要:

「アートマネジメント研究（応用）Ⅴ・Ⅵ」は、芸術文化活動全般からテーマを選び、担当教員の個別指導のもとで研究計画を策定し、調査・分析・発表を行う卒業研究である。一方、「卒業論文」は、その卒業研究の成果を論文としてまとめるものであり、芸術文化の社会における位置づけについて深く考察していく能力を身につけることを目指している。

授業形態:

授業形態は、クラス全体での講義と、担当教員ごとの個別指導とに分かれる。クラス全体での講義では、年度初めに論文執筆の基礎的な知識を提供し、発表や意見交換を行った。後半では個別指導に移行し、学生はそれぞれの研究計画を進めた。

担当教員:

中川俊宏、赤木舞、久保仁志、上村英郷と合わせて 4 名が指導に当たった。各教員が学生の研究テーマを参考に指導し、教員ごとに分散しての個別指導が行われた。

卒業論文提出日:

「卒業論文」の提出日は、今年度は 1 月 20 日に設定され、7 名全員が遅滞なく提出した。

評価方法:

「アートマネジメント研究（応用）Ⅴ・Ⅵ」の成績は、前期・後期ともに担当教員が主に評価し、「卒業論文」については、4名の教員が採点と協議を行い評価した。

学生が教員の指導のもとに研究計画を策定し、調査・分析を行い、独自の研究テーマを通じて深い学びを得るための支援を行います。

(上村)

■2024年度 卒業論文題目一覧

論文題目	執筆者	学籍番号
日本における 音楽のジェンダーギャップについて	菊池 凜果	2127-001
オーケストラのステージマネージャーの就労環境の課題と今後の展望	佐久間 優響	2127-003
神楽の継承と地域の人々	四分一 真世	2127-004
「音楽によるまちづくり」とこれから～川崎市を例に～	西村 唯菜	2127-005
ジュニアオーケストラの運営と今後の展望	増田 舞奈	2127-006
コンサート形態の歴史的変遷と新型コロナウイルスの影響から鑑みる コンサート形態の今後	小菅 友理子	2127-007
放課後等デイサービスにおける音楽が障害児に与える影響について	土屋 舞波	2127-008

■2024年度 卒業研究発表会

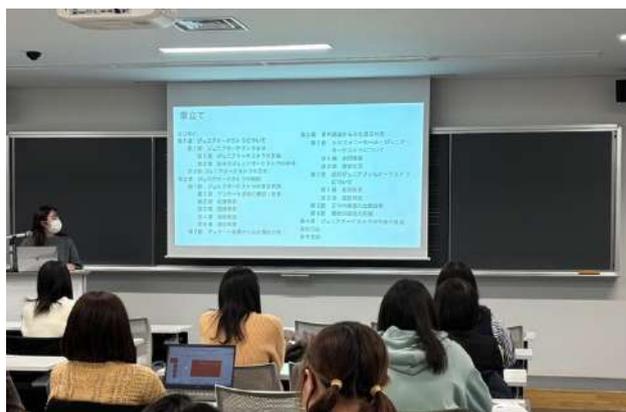
以下のように卒業研究の発表を行った。

《コース内卒業研究発表会》

日 時：2月3日（月）10：30～11：30

場 所：S504室

発表者：菊池 凜果・増田 舞奈



《3 コース合同卒業研究発表会》

日 時：3月23日（日）

場 所：プラームスホール

発表者：四分一 真世

備 考：オープンキャンパスにおけるコース紹介の一環として、
作曲コース、音楽学コース、音楽教育コースとともに合同で研究発表を行った。



4. 2024年度 実習活動

舞台芸術のマネジメント人材の育成は、現場での実践から学ぶ要素が非常に多いという特性を持っている。確かに、講義によって得られる知識や情報は重要だが、教室外での経験もまた貴重なものである。これら両者はお互いに補完し合い、学びの効果を高めるものとなる。以下は、学生たちが実際に体験しながらアートマネジメントを学んださまざまな実習の報告である。

なお、「舞台技術概論Ⅰ・Ⅱ」「劇場音響概論Ⅰ・Ⅱ」「広報宣伝資料製作」「演劇論・演出論」などの科目にも実習的な活動が含まれていますが、それらの科目に関する報告は「各科目からの報告」欄にまとめて掲載している。

(上村)

1) 「アートマネジメント実習Ⅰ・Ⅱ」

◆授業概要

大学主催の公演を中心に、スタッフとして参加し、コンサートホールにおける公演運営について実践的に学ぶ科目である。公演は、オーケストラ等による大規模公演から小規模の学生演奏会（「学生による演奏会」等）まで多種多様で、学内のホールのみならず、東京芸術劇場や東京オペラシティ等でも実習を体験している。

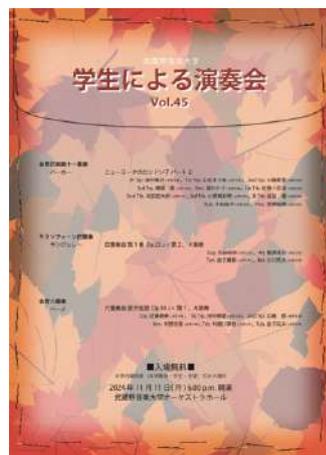
大規模公演における実習内容は、受付業務、チケットもぎり、teketの読み込み、花束受付、会場案内等であった。「学生による演奏会」では、舞台転換、司会、受付業務等の当日運営に加え、今年度からチラシとポスター作成も担当した。学生が主体的に運営することにより、学生同士でアイデアを出し合って効率のよい運営を目指すことや、チームワークの重要性を体感した。

また、今年度は西武鉄道による「江古田キャンパスプロジェクト」に参加し、武蔵大学、日本大学芸術学部の学生とともに、10月と12月に実施した街づくりイベントの企画運営に参加した。

2024年度に実施した実習は以下のとおりである。

(赤木)

開催日	会場	内 容
4月26日(金)	オーケストラホール	学生による演奏会 vol.40
4月28日(日)~30日(月)	ブラムスホール	オペラ公演
5月24日(金)	ウインドアンサンブルホール	学生による演奏会 vol.41
6月13日(木)	ブラムスホール	ニュー・ストリーム・コンサート 52
6月14日(金)	ブラムスホール	ニュー・ストリーム・コンサート 53
6月25日(火)	ウインドアンサンブルホール	学生による演奏会 vol.42
7月1日(月)	ベートーヴェンホール	ケマル・ゲキチ ピアノ・リサイタル
7月3日(水)	ウインドアンサンブルホール	学生による演奏会 vol.43
7月16日(火)	東京芸術劇場	ウインドアンサンブル演奏会 (指揮:ランプレクト)
9月24日(火)	東京芸術劇場	管弦楽団演奏会 (指揮:和田和樹)
10月9日(水)	ウインドアンサンブルホール	学生による演奏会 vol.44
10月26日(土)	江古田駅前	江古田キャンパスプロジェクト「街の演奏会」
11月5日(火)	ブラムスホール	坂東玉三郎特別招聘教授 公開講座
11月11日(月)	オーケストラホール	学生による演奏会 vol.45
11月14日(木)	トッパンホール	ニュー・ストリーム・コンサート 54
11月20日(水)	ベートーヴェンホール	イリヤ・イーティン ピアノ・リサイタル
11月26日(火)	東京オペラシティホール	管弦楽団演奏会 (指揮:飯盛範親)
12月6日(金)	ブラムスホール	アートマネジメントコース企画制作公演
12月9日(月)	ベートーヴェンホール	ウインドアンサンブル演奏会 (指揮:飯盛範親)
12月17日(火)	ウインドアンサンブルホール	学生による演奏会 vol.46
12月22日(日)	日本大学芸術学部キャンパス	江古田キャンパスプロジェクト「クリスマスコンサート」



「学生による演奏会」のチラシ

《ミューズ・フェスティバル》

ミューズ・フェスティバルは本学の学園祭であり、授業ではないが、本コースでは音楽環境運営学科の創設時以来、学科・コースの紹介などの企画をもって参加してきた。近年は、2年生の「アートマネジメント実習Ⅰ・Ⅱ」の一環として取り組んでおり、今年度も同様に2年生が担当した。

昨年に引き続き展示のポスターとパンフレットを作成し、アートマネジメントコースの紹介と共に、「広報宣伝資料製作」の授業内に履修学生が作成した作品（架空の公演のチラシ）を展示し、過去の履修者の作品も含めて紹介する展示を企画した。また、学生のイラストによる教員紹介や学生紹介など、学生の特技を活かした展示や、オリジナルチケットを作成して来場者にもぎり体験をってもらうコーナーも企画した。

さらに、展示会場では4年生の「企画制作演習」公演の宣伝コーナーを設け、企画制作公演の紹介及び、今年度の企画制作公演の宣伝を行った。今年度の公演のチラシ配布とポスターを展示するとともに、過去4年分の公演のチラシとプログラムを展示し、これまでの公演のダイジェスト映像をスクリーンに映して実際の公演模様を見られるようにした。

参加型コーナーとして「季節別！おすすめの曲」という企画を立案し、春夏秋冬それぞれの季節に対して思い浮かぶ曲を投票してもらった。来場者とのコミュニケーションも積極的にとっていた。開催終了後には総括し「ミューズフェスティバル報告書2024」としてまとめられた。

ミューズ・フェスティバルは学生の祭典であり、企画立案や催事運営については学生たちの自発性や自主性を重視している。基本的には学年代表を中心に学生同士での相談で進め、担当教員は側面的にサポートする役割を果たした。

(赤木)



アートマネジメントコースポスター



ミューズフェスティバル会場の模様

2) 「アートマネジメント実習Ⅲ」

◆授業概要

3年次ないしは4年次で履修する必修科目で、学外の文化施設、芸術団体、文化関連団体等におけるインターンシップである。学生自らが実習先を探し、実習受け入れのお願いをすることになっている。実習内容は本人の希望に基づき、先方とご相談させていただいている。実習中は毎日「実習日誌」に業務内容や指導を受けた事項を記入し、実習終了後は実習先のご担当者に所見と成績評価をいただいている。

今年度は、一覧のとおり3年生7名がインターンシップを行うことができた。きめ細やかにご指導いただいた各施設・団体の皆様には心より感謝申し上げるしだいである。

(赤木)

〈実習先及び主な実習内容一覧〉

実習生氏名	実習期間	日数	実習先(機関・施設)	主な実習内容
川村桃加	6月12日～11月9日	10日	新演コンサート/株式会社カモシタピアノ	コンサート運営、プログラム制作等
今川知彩	6月27日～11月17日	10日	ミュージア川崎シンフォニーホール	ホール業務全般
加藤 花	8月1日～9月6日	10日	(株)セブンスエンターテイメント	ライブの運営業務等
吉田百花	8月4日～9月22日	10日	東京文化会館(たましん RISURU ホール)	オペラ公演制作業務
生越一希	8月22日～9月30日	10日	新国立劇場	演劇公演の制作
坂井りずむ	10月24日～12月21日	10日	(株)シアターワークショップ	イベント運営業務等
大塚音和	9月8日～9月29日	10日	(株)ワタナベエンターテインメント	公演運営業務等

3) 芸術文化施設見学実習

○芸術文化施設見学実習の目的

感染症の影響が不透明な中、中止していた芸術文化施設見学実習を今年度再開することができた。芸術文化施設見学実習は、各学年の「アートマネジメント研究」の授業内容の中でも重要な活動です。劇場・音楽ホール・美術館・博物館等を訪問し、バックステージなどを見学させていただき、スタッフの方々のお話を聴かせていただく体験は、アートマネジメントを学ぶ学生たちにとって最良の生きた教材です。

また、事前の調査研究、プレゼンテーションと質疑応答、事後のレポートなども含めて、その教育的効果は極めて大きなものがあり、本学が推進するアクティヴ・ラーニングの好例とも言えるものであるため、「アートマネジメント研究（基礎）」および「アートマネジメント研究（応用）」の授業内容の中にそれぞれ位置づけています。

(上村)

● スケジュール

- ◇ 日程：2024年6月22（土）～23（日）
- ◇ 6月15日（土）：事前研究発表会（於 武蔵野音楽大学）
- ◇ 6月22日（土）
 - ・ 静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ
 - ・ 静岡芸術劇場
- ◇ 6月23日（日）
 - ・ 静岡県舞台芸術センター 舞台芸術公園
 - ・ ポーラ美術館

2024年度 芸術文化施設見学実習

6.22日(土)

10:00 江古田キャンパス集合
10:15 武蔵野音大・江古田キャンパス 出発

海老名SA(11:15～11:25)
(昼食)
富士川SA(12:35～13:35)

14:30 静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ 到着
15:30 静岡芸術劇場へ移動
施設見学
16:30 静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ 出発

16:45 静岡ホテル 時之橋 到着
(夕食)ホテル客室で各自お弁当

19:00 勉強会(21:00終了予定)

6.23日(日)

〈朝食(バイキング)〉館内(7:45～8:15)
9:30 静岡ホテル 時之橋 出発

9:45 静岡県舞台芸術センター 舞台芸術公園 到着
10:00 おやこ小学校見学
施設見学
11:30 SPAC演劇アカデミー 見学
11:50 静岡県舞台芸術センター 舞台芸術公園 出発

〈昼食〉清水エスパス ドリームプラザ(12:25～13:00)

14:25 ポーラ美術館 到着
16:20 ポーラ美術館 出発

〈休館〉海老名SA(17:35～17:50)

18:50 武蔵野音大・江古田キャンパス 到着

【参加者】

- 保険証(コピー可)
- メモ
- 筆記用具(えんぴつ)
- 財布

【注意】

- 服装はフォーマルなもの
- 靴は磨いたないもの
- 飲酒、喫煙禁止
- 見学レポート7月末日A提出!

【引率教員】
上村先生、赤木先生、中川先生、熊澤先生

見学実習のしおり

(1) 施設概要と見学者の感想

1日目 6月22日(土)

静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ

基本情報

グランシップは、「文化創造と交流の拠点」として、静岡県が設置する県立複合文化施設。

現在は、(公財)静岡県文化財団が静岡県からグランシップの指定管理者として指定を受け、グランシップ主催事業、貸館事業、大規模コンベンションや各種学術会議等を通じ、静岡県の文化振興の一翼を担っている。



グランシップ外観

- ・ 愛称：グランシップ
- ・ 所有者・設置者：静岡県
- ・ 設置目的：学術、文化及び芸術の振興並びに国内外との交流を図ること
(静岡県コンベンションアーツセンターの設置及び管理に関する条例 第2条)
- ・ 理念：新たな文化の創造拠点として、人、もの、文化、情報が交わり、人々が集い憩う“県民のオアシス”となること
(企画運営指針1P 平成9年9月 静岡県)
- ・ 開館日：平成11年3月13日
- ・ 設計：建築家 磯崎新／(株)磯崎新アトリエ

○見学者の感想

グランシップについてはとにかく驚きと関心の連続だった。最初に衝撃を受けたのは大ホールである。まるでそこだけで一つの施設と言っても過言ではないような広さは、土地が広い静岡ならではの利点だと思った。

さらに入学式・成人式・式典・スポーツ大会・センターステージを設置したロックバンドの公演など、普通のホールにはあまり見られない活用方法にもただただ感心した。特に、壁が回転して外に繋がる仕掛けは目から鱗だった。ホワイエにも机と椅子があり勉強や会議をしたりする人もいて、ホールの新しい可能性を垣間見た。

また、アーツカウンシルしずおかの無料相談窓口制度も素晴らしいと思う。演奏会を主催するにあたり、勝手がわからないことや細々としたことをサポートしてくれる制度がある事は文化活動の推進に大きくつながっていくと思う。

もし私が近所に住んでいたら通いたいと思うほど素晴らしい施設だった。

(2227-001 今川知彩)

多くの文化施設があり、静岡県が文化事業に力を入れていることを肌で実感した。ホール一つから利用でき、予約できれば全部のホールを使うこともできて、とても幅広い種類のイベントができるなと思った。一番印象に残ったのは、「大ホール・海」だ。グランシップ最大のホールということで施設の大部分を占めており、その規模も私が今まで行ったり知っていたりする中で一番大きかった。見学中、ここならどんなことができるかなと考えるのが止まらなかった。

また、いつもは絶対入れない防災センターを見ることができてとても勉強になった。普段私たちが施設を利用しているとき、常にこういう形で見守っていただけているということを知ることができ、日頃からの感謝を忘れないようにしようと思った。

(2327-004 鈴木智仁)

様々なホールがある中で見学した大ホールの規模感に驚きました。よく見る一般的なホールを想像していたので、設営を変えればダンス、ビッグバンドの発表、インテリアの展示など多岐にわたる用途があることは魅力的だと思います。知名度が低いイベントだったとしても多くの人に広告など宣伝できると感じました。

公式の大会やコンテストに使われるだけでなく、地域の習い事の発表会なども行われることは地域の交流のきっかけになり、活発にさせてくれるのだと思います。イベント自体に接点がない勉強目的の学生や、打ち合わせが目的の人でもグランシップで行われる数々のイベントの宣伝を知ることにつながると感じました。グランシップという大きな施設だからこそできることだと思います。

(2427-002 菊池結衣)



大ホール見学の様子

まず入ってすぐ、グランシップの開かれたエントランスに驚いた。吹き抜けになっており、とても開放的な空間となっていた。グランシッ

プの名の通り、船をモチーフとしたデザインが施されており、堅苦しさや格式ばったものよりも、ユーモアのある親しみやすい空間となっていた。大ホール「海」は、58mもの高さのあるホールで、4,800人もの収容が可能である。窓が設置してあり、太陽光が差し込み非常に気持ちの良い空間だと感じた。天井の高さは圧巻で、とても開放的に感じた。ステージは常設されているわけではなく、床は一面平坦になっている。成人式、入学式、スポーツ大会、ダンス大会と使用用途に合わせ自在に対応できるものだった。

1つ階を上がって登場するエントランスは、机などが常備されており、そこには勉強や仕事の打ち合わせなどで使用している姿がみえた。芸術的なホールとしての用途だけでなく、住民の個人の活動の場としても多く利用されていることが伺えた。さらに上に上がると展示ギャラリーと交流ホールが登場する。この2つも使用用途に合わせ、会場を自由自在に構成できるものだった。特に交流ホールは、会議からパフォーマンス、パーティなど使用用途が大変広がった。主催公演も勿論充実している本施設だが、貸館への対応も大変充実していた。貸館専用窓口や、ワンストップサービスなど、主催公演だけでなく、貸館のサービスにも力を入れていることが伺えた。

(2127-001 菊池凜果)

「県民の心のオアシス」となることを理念とし、立地も良く環境が揃っているため静岡県がとても力を入れていることが伝わってきた。全体的なデザインが「海」に関わるものになっており、シップのイメージをわかりやすく理解することができた。

「大ホール・海」の大きさに驚いた。見学実習に行く際、ちょうど「沈黙の戦艦」を鑑賞しており、実際にロケをされた場所に立てたことに感動した。上から見下ろすような客席が多く、マーチングの演奏会も可能と感じたため、企画を立てる機会があれば検討しようと思う。

交流ホールは初めてみる形のホールで、様々な使用用途があることがわかった。会議や演奏

会だけでなくダンスパーティーなども開催されることが知り驚いた。壁に埋まっているスピーカーや4方向にある収納可能なスクリーンなどもあり、デザインだけでなく実用性も兼ねた素晴らしいホールだとわかった。

(2327-002 上田連也)

大ホール・海の規模がすごいと思いました。今まで見たことのないホールでした。このホールで実際に行われている演奏会やイベントを生で見てみたいと思いました。また、扉を回転させて外の芝生と一体化し、イベントを開催することができるかと仰っていたので、外と繋がった景色も見てみたいです。交流ホールでは周りの壁にスピーカーが内蔵されているとのことでも驚きました。

こんなにもどのホールでも様々な用途で利用することができる施設は、中々ないと思います。施設内に誰でも自由に利用できるスペースがあるなど地域に寄り添った施設だなと感じました。今度は中ホール内も是非見てみたいです。また、その他のホールでの演奏会にも行ってみたいです。

(2127-006 増田舞奈)



ホール職員による施設の説明

この施設全体が船を模して造られていて施設内には至る所に船の一部分を模した案内板などがありました。この施設内にある各ホールは自然に関わる名前になっていました。大ホール・海は体育館や大きな会議室のような感じになっ

ていました。正面の扉を開けると外の芝生につながっていました。開けてみるととても開放感があり景色も良いステージができることがわかりました。閉めている時も独特な形状で良いですが、開けると外の景色が一体となり、とても広いのもっと広く感じました。舞台の設定がないので出演者側で好きにレイアウトできる場所も良いと感じました。各ホールに使用目的が大まかに決まっているつくりのものもありますが、自分で好きに変えられる作りなのは他にはないような発想でとても良いと感じました。

(2327-007 木村りん)

大きな船をモチーフとしているため、所々に海を連想させるものがあった。

ホワイエには、床や壁に大理石、化石が埋まっており、化石を探したりして、子供と一緒に楽しめる工夫がされていて、海から化石、そして床に埋めて足元をよく見る子供も楽しめるし、子供心をくすぐられる発想が素敵だと感じた。

中ホール大地は、最も利用頻度が高く、ミュージカルやバレエに使われ、879席、950席など使用用途に合わせて座席の調節が可能であり、今回、見学することは出来なかったが、「中」ホールでこの規模は地元には考えられない広さだと感じた。

大ホール海は、入った瞬間から開放的でとても広くて驚いた。その広さから大陸を連想させるため、「海」と名付けられたそう。約4600人入ることができ、大学の入学式、成人式、インテリアの展示会、ダンスの大会、スポーツ大会などに使用されている。一見広々としていて客席が二階席からしかないのが気になったが、椅子やステージは下に収納されているということにとっても驚いた。

全体的にコンセプトがはっきりしていて、そのコンセプトを連想させるものが建物中に広がっており、このグランシップという船で、芸術の旅に出ているような気分になれるような建物だと感じた。

(2327-010 松浦愛里)

静岡芸術劇場

基本情報

静岡芸術劇場は、グランシップ（静岡県コンベンションアーツセンター）の東側部分に位置し、1999年にオープンした、地方から創造・発信する舞台芸術のための専門施設。貸館を行わず、SPAC（静岡県舞台芸術センター/1995年設立）の専用施設として運営されている。

専属の劇団を擁し、芸術総監督を中心に活動する日本初のヨーロッパ型の公立劇場。レンガの石壁が深紅の客席と闇深い舞台を囲み、贅沢で落ち着いた雰囲気醸し出している。

プロセニウムを持たない広い舞台と、馬蹄形の客席からなる劇場空間は、演じる側と観る側の一体感を生み、どこにいても舞台の迫力を間近に感じることができる理想的な造りになっている。リハーサル室、衣裳制作室が最上階に併設されるなど、舞台芸術の創造、発表のための設備を完備している。



静岡芸術劇場 劇場内

- ・ 設計：建築家 磯崎新
- ・ セミオープン形式
- ・ 客席（固定・ギャラリー席2層）：最大401席
[車椅子席2席分、親子室1室4席含む]
- ・ ホワイエ、クローク、カフェ、楽屋7室
- ・ 舞台間口：16.2m、舞台奥行き：16.3m、すのこ高：19m

○見学者の感想

劇場を見て持った印象は、客席と舞台との距離が近く演者の生の声を感じることができるため、会場で直接舞台を見たいと思える理由の一つになるかもしれないと思った。実際のリハーサルを見てセリフと動きを別々にするやり方は馴染みがなくて不思議で、そうすることによる効果が最初は思いつかなかったが、海外公演での利点や宮城聡さんのお芝居に対する考えを聞いて、芸術の原点に帰って考え直すことができた見学だった。また、リハーサル室の近くに衣裳制作室があると舞台の練習をしながらでも衣裳についても同時に考えられる利点があるのだなと思った。外部に制作を依頼すると、やり取りや衣裳を送る時間が取られてしまうデメリットは大きいと気付けた。練習以外にかかる時間が削減されて、よりよい舞台を作れるのだなと思った。

(2327-001 池野明日香)

劇場までの動線が分かりやすかったです。キャパシティは400席程とこじんまりとした空間で、稽古からも演者の熱やエネルギーを感じることが出来ました。客席よりも舞台の方が広いというお話を聞き、そんな劇場があるのかととても驚きました。

衣裳は、基本的に3人で作っていて、大変な時は外部から人を呼んだり、学生ボランティアや俳優が手伝ってくれることもあるそうです。作る人数が少なく驚きました。舞台を身近に感じながら作業が出来るのが魅力と仰っていて、完成形やどのように使われるのか見えることは大事だなと改めて実感しました。

再演するつもりで小道具を作っている、ものの置き場が無く捨ててしまうものもあるが、別の作品でリメイクして使っているというお話をされていて、SPACが長く続く理由、作品が長く愛される理由でもあると感じました。

(2227-007 加藤 花)

静岡芸術劇場は、独自の作品を創り、国内外の芸術家や劇団を招聘し、若手芸術家の育成を行う他ワークショップやアウトリーチ活動にも力を入れる等といった幅広い活動を行っている。

劇場施設内には衣裳部屋があり、デザインを考え衣裳を製作している。衣裳はメンテナンスし、再利用する事もよくある。衣裳係は基本的に3人だが、足りない場合は衣裳が作れる他のスタッフや役者、近くにある学校の学生をボランティアで呼ぶ事もある。

SPACは作品を創り、芸術家や劇団を招聘する他にも若手芸術家の育成やワークショップ、アウトリーチ活動にも力を入れているので幅広く活動をしていて素晴らしいと思った。また衣裳を大切に扱っていて、衣裳づくりにSPACの他のスタッフや役者が手伝いしているので、色々な事をこなしていて凄いなと思った。

(2127-008 土屋舞波)



リハーサル室の見学

《天守物語》のリハーサルを見学させていただいた。生の現場の見学は初めてのことで、貴重な体験だった。本番前最後のリハーサルで緊迫した空気が流れていた。

2回分のカーテンコールを綿密に練習しており、両者で特徴が異なっていた。1回目はそれぞれの役柄に合わせた動きだった。例えば、ある俳優は両腕を横に広げ、鳥のように動かしていた。2回目は全員で歩き方や速度を統一していた。このことから、1回目は役として、2回目は一人の俳優として観客に気持ちを伝えているの

ではないかと感じた。

また、観客の特質に合わせた作品作りが印象的だ。中国公演に向けてのリハーサルだった。

「失礼ごめん。」という台詞について監督が、「現地のお客様は、その台詞の意味までは正確にわからないため、言葉の迫力や声量で意味を表現するように」と指導なさっていた。このような丁寧な作品作りが、国内問わず、海外からも高い評価を得ている理由の一つなのだと実感した。

(2127-004 四分一 真世)

静岡芸術劇場は、事前学習で担当したところだったので、ある程度の施設の内容は分かっていたのですが、実際に見たり説明を受けたりすると調べが足りず、気づかなかったところがありました。

1つ目は、舞台の造りについてです。あまりないセミオープン形式となっている舞台は、事前学習の中でも特に調べた部分でした。しかし、舞台が客席よりも大きいという通常の劇場とは大きく違うことを見落としていました。設計図で見ると、確かに舞台の方が大きな造りとなっており、実際に見ると迫力のある舞台と客席の一体感にとっても圧倒される劇場でした。

2つ目は、衣裳製作室についてです。1から制作をし、メンテナンスもそこで行うにもかかわらず、通常3人で作業を行っている聞きすぎに驚きました。また、俳優さんも一緒に制作したりすると聞き、作品創りを行うすべての人とコミュニケーションが取りやすい環境だから良い作品が生まれるのだと感じました。

(2427-003 早川 樂)



静岡芸術劇場ロビーにて

2日目 6月23日(日)

静岡県舞台芸術センター 舞台芸術公園

基本情報

東京ドーム4倍ほどの広さを持つ日本平北麓の緑濃い園内に、野外劇場「有度」、屋内ホール「楯円堂」、BOXシアター、稽古場や研修交流宿泊棟等、10棟の建物が整備されている。静岡県舞台芸術センター(SPAC)の活動拠点として、演劇やダンス、能など新しい舞台芸術作品を生み出し、静岡から全国へ、世界に向けて発信していく舞台芸術の創造拠点である。

野外劇場「有度」は、舞台芸術公園全体のコンセプトである「自然との共生・調和」を集約的に表現している劇場である。伊豆で採石された「若草石」を敷き詰め、落ち着いた黒で統一された外壁とあいまって、濃密な舞台空間を作り上げている。



屋内ホール「楯円堂」は、漆黒の舞台と白木の柱とが一体となった空間で、天井のドームから差し込む光によって、一種宗教的な雰囲気になり、観る者の意識を研ぎ澄ませます。建物は2層から成り、入口のある上層部には、畳が敷き詰められた回廊と、富士山を正面に望む眺望抜群のラウンジがある。



SPACについて

SPACとは、(Shizuoka Performing Arts Center)の略であり、正式な法人名は、公益財団法人静岡県舞台芸術センターである。専用の劇場や稽古場を拠点として、俳優、舞台技術・制作スタッフが活動を行う日本で初めての公立文化事業集団であり、舞台芸術作品の創造・上演とともに、優れた舞台芸術の紹介や舞台芸術家の育成を事業目的としている。

1997年から初代芸術総監督鈴木忠志のもとで本格的な活動を開始。2007年より宮城聡が芸術総監督に就任し、更に事業を発展させている。

演劇の創造、上演、招聘活動以外にも、教育機関としての公共劇場のあり方を重視し、中高生鑑賞事業公演や人材育成事業、アウトリーチ活動などを続けている。2018年度グッドデザイン賞を受賞、無形の活動が一つのデザインとして高く評価された。



○見学者の感想

劇場の歴史について解説した展示が印象的だった。壁一面に貼られたポスターやフライヤーも、わかりやすく見やすく解説された展示も、興味をかきたてるととても良い内容だと感じた。

長すぎる文章もなく、いい意味で解説らしくなく、視覚的にも楽しい。好きな劇場について書いて貼る参加型のコーナーもあり、劇場に興味を持ってほしい、もっと芸術を身近に楽しんでもほしいという思いが感じられて、あの展示空間が好きだった。

楯円堂や野外の劇場など舞台芸術公園ならではの様々な劇場についても、解説を聞いていてとても楽しかった。楯円堂で天井の白い布を外して外が見えるのはテアトロ・オリンピコが天井に空の絵を描いていたから、と教えていただき感動したのを覚えている。

おやこ小学校もとても良い取り組みだと思った。芸術には、家族に寄り添い子どもを育てる力もあるのだと思うと、とても嬉しい気持ちになった。

(2227-002 川村桃加)



ミニミュージアム「てあとろん」

私達が最初に行った場所は「てあとろん」という昔から現在までの劇場の歴史が分かるミニミュージアムだった。てあとろんは、SPAC公演のポスターが壁にたくさん貼っていて、SPACや他の劇場の歴史を見ることが出来るブースもあった。ここのミュージアムは全て手作りだ。

野外劇場の「有度」は、日比谷公園音楽堂のような作りになっていた。屋内ホールの「楯円堂」は、一階が畳の部屋で休憩スペースのような作りだった。地下に行くとテアトロ・オリンピコをモチーフにした暗い劇場がある。この劇場は外に繋がり、床を外すことが可能で柱の一部を外すことが出来ることに驚いた。BOXシアターでは、2つの部屋があって片方の部屋ではおやこ小学校の活動が行われており、親子が即興で演奏をしていて、楽しそうに感じた。

(2327-003 酒井千妃呂)



屋内ホールの「楯円堂」の見学

舞台芸術公園は、SPACの専用施設であり、管理運営共にSPACが行っている。そのため、野外劇場などは外部への貸し出しは一切行っていないとのことだった。専用施設としての他に「公園」としての要素も兼ね備えており、公園内は一般の方々にも開放されている。茶畑が公園の至る所にあるのが印象的であった。

また野外劇場「有度」では、観客は合羽を着用し、演者はそのまま実際に雨の中公演を行ったこともあると伺った。屋外ではない空間で見る演劇を私も見てみたいと感じた。また、公演の際はマイクを使用せず、山の斜面等の自然を利用して声を反響させ、場を共有するというコンセプトのもと、公演を行っているとも伺った。

舞台芸術公園は自然のあふれる豊かな空間であった。一般の方には「公園」という認識が強く、SPACが行っている様々な活動をさらに広く

知ってもらうためにも、今よりもさらに外部に向けた活動を行う必要があると感じた。

(2127-003 佐久間優響)

舞台芸術公園は名前の通り、単なる大きな公園のように見えるその場所に、考えこまれた劇場や展示スペースが詰め込まれていることに感激した。古代ギリシャ、ルネッサンス、現代風に作られたそれぞれの劇場は全て特徴的で、ここでの演目を見てみたいと高揚感を掻き立てられた。

特に野外劇場は、お客さんとの一体感で成り立つ舞台という言葉がとてもしっくりくるような造りで面白いと感じた。作品ではなく場の持っている力があるという言葉は、今でも心に残っている。SPACらしさと言われる雨でも構わず公演が開催されることや、木に照明を当てるところなど、今まで出会ったことの無い手法も非常に興味深かった。

また、おやこ小学校の取り組みは、音楽を純粹に楽しんでいる親子の様子が本当に生き生きとしていて、自然と涙が出た。芸術文化と聞くと固い印象を持ってしまう人も多いと思うが、おやこ小学校のような取り組みが広まれば、もっと多くの人に芸術の楽しさを身近に感じてもらえるのではないかと考えた。

(2227-005 生越一希)

舞台芸術公園は、自然と芸術の融合を体現できる場所である。てあとろん、野外劇場、楢円堂、すぱっくおやこ小学校、BOX シアターを見学した。

豊かな自然に囲まれた中で演劇を観賞し、体験できるということは、演劇の原点に立ち返るような感覚を与えてくれる。特に、デュオニソス劇場やグローブ座をモデルにした野外劇場は印象的であった。その独特な雰囲気と、これまで写真でしか見たことのないような形から、実際に観劇してみたいなと思った。背景の木に照明を当てるといった自然との共生を意識した演出も興味深かった。

また、すぱっくおやこ小学校は、単純なリズムから複雑ながらも1つの音楽作品が生まれていく過程が印象的だった。さらに、「てあとろん」での手作りの劇場の歴史展示は、施設の歴史と施設の方々の熱意を伝える素晴らしい取り組みだと感じた。

(2327-009 中村萌彩)



舞台芸術公園にて

ポーラ美術館

基本情報

ポーラ美術館は、2002年に神奈川県箱根町に開館した。開館以来、「箱根の自然と美術の共生」というコンセプトを掲げている。箱根の自然と景観に配慮した建物は、高さを地上8mに抑え、建物の多くを地下に置き、森にとけこんでいる。また展示室は、ひとつひとつの作品が美しく鑑賞できるように独自開発の照明を採用している。

ポーラ美術館のコレクションは、ポーラ創業者2代目の鈴木常司が40数年にかけて収集したもので、西洋絵画、日本の洋画、日本画、版画、東洋陶磁、ガラス工芸、古今東西の化粧道具など、多岐にわたり、総数1万点にのぼる。

優れた作品と豊かな自然、そして光に満ちた建築空間が織りなす美の世界が楽しめる施設である。



- ・ 名称：公益財団法人ポーラ美術振興財団
ポーラ美術館
- ・ 館長：野口弘子
- ・ 博物館法による分類：登録博物館
- ・ 設置者：(公財) ポーラ美術振興財団
- ・ 開館年月日：2002年9月6日
- ・ 所在地：神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285

○見学者の感想

元々、印象派が好きで美術館に観に行っていたこともあり、ポーラ美術館が一番面白いと感じました。印象派は筆触分割といってイメージに合う色になるまで混色を行わず一つ一つ筆触が隣り合うようにしているのが感じとれてよかったです。そのため、印象派の絵は写真やテレビで見るときと、現地で近くまで観たときと受け取り方が違うことを実感できました。

また、モネの絵の柔らかい風景画のなかで、リヒターの絵が強烈でした。ゲルハルト・リヒターはこの機会に知りましたが、印象派として光の表現を大切にしている様子が窺える気がして興味を持ちました。

映像の作品もあり楽しかったです。人が弾かずともピアノが音を奏でていて不思議でした。また、よく見ると絵によっては額縁を意図的に変えてあることに気づきました。絵をどう見せるかこだわりを感じられました。

(2427-002 菊池結衣)



美術館におけるレクチャー

ポーラ美術館は、建物の高さ制限がある中でも、自然光が多く入るように設計されているのが特徴的だ。年間約20万人が来場しているという。国内では上位を争うほどにモネの作品を収蔵しており、他にもゴッガンやピカソ、ルノアールの作品も多数収蔵されている。近年はゲルハルト・リヒターやヴォルフガング・ティルマンズ、ロン・ホーンはじめとする現代絵画を集めており、また、若手芸術家の在外研修の助成も行っているとうかがった。

今回はコレクション展と、企画展「フィリップ・パレーノ：この場所、あの空」を鑑賞した。コレクション展は19世紀後半から20世紀前半に活躍した画家たちの名作が展示されていた。現代のフランス美術を代表するフィリップ・パレーノの作品は、今まで見たことのない展示方法や作品が多かった。中でも、数秒ごとにすりガラスのようになって別の作品が見えるという作品が印象的だった。

(2327-006 松谷友里菜)

建物はガラス張りで光が入りやすい構造になっていて、天気の良い日だと光に包まれているような雰囲気になるのではないかと感じた。近代の作品が多く、現在は現代アート（戦後以降）の作品を集めているようだ。

今回、開催されている「フィリップ・パレーノ：この場所、あの空」という企画展では映像や自動式演奏ピアノを使用した作品や、ヘリウムガスを使用し魚の風船を浮かせている作品など初めて見るような作品が多く、刺激的で面白かった。特に自動演奏ピアノを使用した作品は、後ろの壁にスピーカーが埋め込まれており、重低音が体に響いているの感じ、印象的であった。私はもともと美術館に行くことが好きなので、今回の見学実習でポーラ美術館へ行ったことで、作品以外のことも勉強になったことが多々あり非常に充実した経験であった。

(2327-008 佐野心咲)



ポーラ美術館館内にて熊澤先生による解説

最初に美術館に入ったとき、その建築様式に衝撃を受けた。自然とアートが融合しているのだが、天気が悪かったので残念ながら視界はよくなかった。6つか7つのセクションがあり、それぞれが異なっていた。私はこの美術館であらゆる形のアートを観ることができた。印象派の絵や抽象画を見たり、美術館の照明や絵の配置について先生の説明を聞いたりした。「私の部屋は金魚」という、金魚の風船が風によって宙に浮き、まるで私が金魚と一緒に海を泳いでいるかのような現代アート作品も観た。どの美術作品も違った印象を私に与えてくれる。美術館の外の作品を観ることができなかったのは残念だった。また、鑑賞時間が比較的短かったこともあり、いくつかの作品は十分に感じ、体験することができなかったが、それでも今回私が観た展覧会はとても興味深かった。

(2024-005 李 怡婷)

(2)芸術文化施設見学実習における事前研究・プレゼンテーション

芸術文化施設見学実習を実施する場合、訪問施設に対する事前調査・研究が不可欠である。

平成 25 年度より、全学年の学生を対象として、見学実習のための事前研究・プレゼンテーションも実施している。訪問施設の基本情報のほか、各々の施設に関連する様々な事項を学生が調査し、施設見学前後にパワーポイントを用いてプレゼンテーションを行うというものだ。学生は、基本的には二人一組でプレゼンテーションを割り当てられ、指定された担当施設に関する調査内容を発表することが求められている。

調査結果の発表を行ったうえで、施設に実際に見学することにより、個々の事例に対する理解度が深められるとともに、その内容をプレゼンテーションすることで、学生同士が批判的に意見交換を行うことが求められている。



6 月 22 日 静岡宿泊先での事前勉強会

5.各科目からの報告

「企画制作演習 I・II」

アートマネジメントコース 4 年生の必修科目である。卒業論文が理論的な学修の集大成であるのに対する、実践的な学修の集大成であり、4 年間の学びの成果が発揮される科目である。

I および II を通して、学生たちが力を合わせて演奏会を企画制作し、学内のホールにおいて実際に演奏会を開催する。「アートマネジメント研究（応用）I・II」において学んだ企画制作の知識をもとに、「アートマネジメント実習 I～III」における現場体験を生かし、1 つの演奏会を創り上げることによって、音楽公演制作者として必要とされる実務的な技能を修得することを目標としている。

I（前期）では、演奏会企画の立案と、実現に向けての準備作業を進めた。企画性の高い公演を目指し、履修学生全員から提案されたアイデアをもとに検討を進め、相互の意見交換によって企画案を絞り込み、練り上げて最終的に 1 つの企画にまとめた。さらに具体的に公演のプランを作成し、出演者、編曲者等に協力を依頼し、宣伝材料の準備までを行った。

また II（後期）では、I において立案した公演計画に沿って、学内ホールにおける演奏会実現に向けて、リハーサル等の諸々の制作業務を進める一方、照明プランの作成、チラシや公演プログラムの編集、宣伝活動などを並行して行い、公演当日を迎えた。また公演終了後には、アンケートを集計するとともに、出演契約書や収支計算書などを模擬的に作成し、一連の企画制作業務について自己点検を行った。

前期 15 回、後期 15 回の授業時間に、教室において講義や打合せ等を行ったが、授業時間外にも、各担当学生が、アートマネジメント研究室、ブラムスホールなどにおいて必要な作業を進め、12 月 6 日（金）つつがなく演奏会を開催した。



公演チラシ（表・裏）

授業内容の詳細は『令和 6 年度企画制作演習報告書』に記録を残しているが、本科目の授業成果発表として実施した演奏会の概略は以下のとおりである。

【公演名】音を奏でる絵画 ～響き合う音と色彩の世界～

【日時】2024年12月6日（金）18:30～20:10（18:00開場）

【会場】武蔵野音楽大学 ブラームスホール（423席）

【入場料】無料（全席指定）＊チケットは **teket** のシステムを活用した事前予約制

【企画趣旨】

聴覚芸術たる「音楽」と視覚芸術たる「絵画」。また時間芸術である「音楽」と空間芸術である「絵画」。一見、両者は交わりのないものを感じられる。しかしそれらは、創造的なプロセスにおいて、長い歴史の中で互いに大きな影響を与え合ってきたのではなかろうか。このコンサートでは、音楽からイメージーションを膨らませて描かれた絵画や、反対に絵画に描かれた世界にインスパイアされた音楽などを紹介し、互いに響き合う芸術作品が表現する世界を「聴覚」と「視覚」を通して体感してもらうことを試みる。

【プログラム】

オープニング

エルガー 愛の挨拶

第1部

ドビュッシー 《ベルガマスク組曲》より 前奏曲

ワルトトイフェル 編曲：生澤 明子 ワルツ《女学生》

ドビュッシー 《ベルガマスク組曲》より 〈月の光〉

ジャガール「夢の花束」よりメドレー

編曲：黄 蕾、党 悦文、費 掾昊、周 建宏、莫 少峰

第2部

プーランク 編曲：J. ヴォーゲル シテール島への船出

ドビュッシー 喜びの島

ドビュッシー 編曲：A. カブレ 交響詩《海》より 第1楽章〈海の夜明けから真昼まで〉

真島 俊夫 編曲：武藤 大将 富士山 ～北斎の版画に触発されて～

【演奏】

Pf. 金谷知歩／篠田音姫／瀬良杏奈／藤川拓巳／吉田千壽心

Vn. 荒木七海／吉田翔音 Vc. 谷藤雅規 Cb. 伊藤瑠花

F1. 菅野まち Cl. 宮野恵輔 Hrn. 吉田桃音／蘭 翔宇

Perc. 敦賀朝香

Conductor 須藤洋亮

（本学学生）

【司会】

西村唯菜（本学アートマネジメントコース4年）

【編曲】

生澤明子／黄 蕾／党 悦文／費 掾昊／周 建宏／莫 少峰／武藤大将（本学作曲コース学生）

【楽曲解説原稿執筆】

佐野桃夏／村井美穂（本学音楽学コース学生）

【絵画解説監修】

熊澤弘先生（本学講師）

【映像編集協力】

間山駿（本学音楽環境運営学科10期生）

【照明技術協力】

岡坂玲奈（本学アートマネジメントコース4期生）

【制作スタッフ】

リーダー：西村唯菜

サブリーダー：菊池凜果／四分一真世

制作：佐久間優響／増田舞奈

営業：菊池凜果／小菅友理子

広報：四分一真世／西村唯菜／土屋舞波（アートマネジメントコース4年）

(中川)



「舞台技術概論Ⅰ・Ⅱ」

担当教員：西田 俊郎

前期

24年度前期は、3年生1名 2年生10名の合計11名での授業になった。

3年生に関しては、アートマに転科して来た生徒だが、なんの問題もなく授業に参加していた。2年生は、授業態度は真面目で、コミュニケーションもとれ、課外授業でのオペラ鑑賞における課題に対しても真摯に取り組んでいた。

後期

今年度は、後期においても、課外授業で日生劇場での藤原歌劇公演 ドニゼッテ作曲「ピア・デ・トロメイ」を鑑賞した。前期で鑑賞したロッシーニ作曲「チェネレントラ」より面白いとの感想が多く出た。生徒には、舞台に足を運んで数多く作品を観るように伝えているが、良い作品に出会うことが出来ればと願っている。

ブラームスホールに於ける照明実習

実習日程	1回目 11月23日(土)	2回目 11月30日(土)
	3回目 12月7日(土)	4回目 12月14日(土)

ブラームスホールでの後期授業は、2年生9名 社会人1名の10名での実習となった。今年度は、5人組を2グループ作り、それぞれのグループで話し合い、演奏する曲を決め、照明デザインも考える実践的授業である。ブラームスホールは、コンサートホールのため、音は良いホールである。

- 1回目 操作卓での操作を覚える。
- 2回目 操作卓で機材を動かして、色を作り明かりのポジションを取る。
- 3回目 演奏する側と照明デザインする側とに分かれてデザインを考える。
- 4回目 ゲネプロと本番

実習を終えて感じたことは、座学で学んだ、光の三原色を使ってそれぞれの曲に合った照明デザインを考えていくのだが、操作卓に興味あるもの デザインに興味あるものまちまちであった。本番日において、1グループ目のリーダーである学生が、コロナにより病欠となったが、曲目を急遽変更する対応を見せる柔軟な動きをした。アートマネジメントコースであるが、学生それぞれが楽器が出来ることは素晴らしい事である。

授業とは別だが、24年度4年生卒業企画公演が12月6日にあった。3年前、初めて受け持った学生達だが、自分達で照明卓を操作し照明デザインを考え舞台を創作し作るあげた4年生の育った姿を見て、照明の授業も無駄ではないと感じた。

(西田)

「広報宣伝資料製作」

担当教員：松永 路

本年度は11名の学生とで授業をすすめた。

「広報宣伝資料製作」で何を学び、何を製作するのかを伝えスタートした。「架空の演奏会」の企画をし、最終的には「宣伝のチラシ製作」を課題とし、チラシ製作の目処のついた学生はプログラムの製作もした。

「架空の演奏会」はクラシックの公演を目標とした。授業のおおまかな流れは下記の通り。

- ①「架空の演奏会」の企画
- ②企画書の作成
- ③各々で企画内容の確認
- ④チラシのデザインのラフを描く
- ⑤Adobe を使いデザインする

企画内容を進めている途中、知人のコピーライターに「キャッチコピー」の大切さの講義をして頂いた。学生には『気に入っている（なっている）キャッチコピー』を発表してもらいディスカッションする楽しい授業になった。（毎年2回目の授業でチラシでも同じようなことをしている）

Adobe の操作は皆問題なく、個人的に使っていて慣れている学生もいた。iPad などのフリーソフトで素材作りをする学生もおり時代の変化を感じた。

学生の成果物は「興味のあるジャンルでOK」ともしている為、『見え方』がクラシックから離れていくこともあるので今後は注意して進めていこうと考えている。

学生と接して現在では情報を取りに行くときには、知りたい内容、タイミングなどは SNS の普及でだいぶ変化していると感じた。情報は場合によっては特別なものとなり広報宣伝のあり方の変化も注視していこうと考えている。

(松永)

「劇場音響概論 I・II」

担当教員：百合山真人・松宮辰太郎

3年次の必修科目である「劇場音響概論 I・II」は、前・後期を通して、劇場における音響の役割を多角的に考察し、舞台音響の基礎を学ぶことを目的としている。

前期は、舞台芸術を創造する様々な領域の劇場スタッフの仕事を理解し、各スタッフとのコミュニケーションの取り方や観客との関わり、舞台芸術者に必要な「音」の知識と音響プランの構成を学ぶ。

後期は、聴覚の演出家とも言われる「舞台音響の仕事」を実践的に学ぶため、録音スタジオでラジオドラマを共同で制作する。履修する学生全員が主体となり、物語の選定と台本作成、演出・配役・音響プランの構成を行う。効果音作りや選曲、録音・編集・ミックスなどの作業を通し、音だけで表現するラジオドラマの世界を体験し、無から有を生む舞台芸術に関わるスタッフに必要な発想力とコミュニケーション能力を磨き、アートマネジメントに携わる人材の育成を目指す。

■総括

前期の授業内で、2023年から復活した新国立劇場の見学を前任の渡邊先生のご尽力もあり、今年度も無事行うことができた。小劇場、中劇場、オペラパレスと全ての劇場を隅々まで見学を行った。学生のレポートの中で、「オペラハウスにおいて、公演に向けて大道具を製作しているチームがいて、劇場が休みの時でもスタッフは公演に向けて働いているという姿は印象に残った」と述べる学生もいて、劇場に関わるスタッフたちの日常を垣間見る大変有意義な時間であったと思う。来年度も新国立劇場の方々のご協力のもと、引き続き進めていきたい。

また、授業の時間割が1限ということもあり、朝は脳と身体が起きてないように感じたので、「音と耳と心を澄ます」というコンセプトの元、サウンドスケープ（音風景）の提唱者であるカナダの思想家・現代音楽家 R・マリー・シェーファーの「音探しの本～リトルサウンドエデュケーション～」より抜粋した音にまつわるゲームをアイドリングで行った。また、本学の周辺の音は何があるのか、聞こえた音をリストアップしていくサウンドマップも行った。座学も大事で、感覚を取り戻す時間はやはり有用であったように思える。本の中では、例えばこんなワークがある。

- ・今朝、起きて初めて聴いた音はどんな音？
- ・前に聴いたことがあるのに、もう絶対に聴けない音をいくつくらい知っているかな？
- ・冷たいお水と温かいお湯と、コッソんとたたいてみたら、どちらのグラスが高い音がするだろう？

その中で本学オリジナルの音遊びゲームである、「ももかもかゲーム」というものを紹介したい。名前が「ももか」という学生が二人いたため、黒板に背を向けてもらい、残りの学生が「ももか」という名前を呼ぶものである。自分の名前が呼ばれたと思ったら振り向く。結果は、同じ名前であるのに、呼ばれたと思ったら振り向くと正解しており、どちらの「ももか」なのかを判別できた。「ももか」という同じ文字かもしれないが、呼ぶ人の意識と方向により違う「ももか」となり、相手に伝わるといふことに気付いたと思う。

一年間の最後の方で、学生たちに振り返ってもらい、どのゲームが面白かったか聞いてみると、この「ももかもかゲーム」が印象に残っていたようだ。こうした体験から分かることは、対象物に対して音を発するという事は、音楽を演奏する際でも同じことが言えるということ。武蔵野音楽大学に入学し、楽器演奏の素養も備わっている本学の学生だからこそ、音の持つ意味や力に対する多角的な側面に気づく瞬間でもあるように感じた。

後期では、「いっぴきおおかみとおほしさま」（作：まつむらまいこ）という絵本を題材にすると皆で決め、ラジオドラマの制作に取り組んだ。全ては学生たち主導で始まり、絵本の中のナレーション

をラジオドラマとした時に繋がりが生まれるよう脚色し、声の録音・編集、選曲、効果音作成という流れで取り組んだ。作品の出来は、プロの目線で見ても、皆の想いが伝わり、とてもよく出来ていた。

サプライズとして、作者である松村さんに音源を送り聞いて頂き、以下のコメントを頂いた。(一部抜粋)

「自分のかいた物語が新たな作品に生まれ変わったようで新鮮で、作品世界をしっかりと表現してくださっていて嬉しく思いました。」

この一年間、皆が自主的に授業に取り組んだ結果として、一生懸命作った作品が報われた瞬間であったように思える。誰に届けるかという作品作りにおいて大事な要素を大切に、4年生の企画制作演習や将来の糧として羽ばたいてもらいたい。

(百合山・松宮)

「芸術文化政策論Ⅰ・Ⅱ」

担当教員：赤木 舞

3年次の必修科目である「芸術文化政策論Ⅰ・Ⅱ」は、文化政策に関する全般的な概要を把握し、国および地方公共団体の文化行政の構造、政策の方向性、およびその基盤を形成している文化関連の法制度等を幅広く学び、わが国の芸術文化政策に関する理解を深めることを目標としている。

前期の「芸術文化政策論Ⅰ」は、わが国の文化政策の意義、歴史、法制度(文化芸術基本法、劇場法、文化財保護法、著作権法等)、予算等について学び、文化政策に関する基礎的な知識を修得し、国や地方自治体による具体的な支援政策について学んだ。前期の最終授業は、各学生が異なる自治体の文化振興条例を2つ取りあげ、相違点について分析したものを発表した。

後期の「芸術文化政策論Ⅱ」は、文化政策の観点から公立文化施設ならびに芸術文化団体の運営、文化財の保存活用とまちづくり、芸術分野の教育普及活動、国際交流といったテーマに関して幅広く学んだ。また、欧米、アジア諸国の文化政策について概観し、比較することにより、わが国の文化政策の特徴や方向性について理解を深めた。1年間の総括として、音楽祭/芸術祭または文化財による地域のまちづくりの事例についてプレゼンテーションを行い、国の政策のみならず、地方の文化行政の実情についても学ぶ機会となった。

◆総括

基本的には座学の授業であるが、文化政策についてより身近に感じてもらうため、授業に関連する新聞記事や、インターネット上で話題となっているトピック、近年発行された調査報告書等を活用しながら授業を進めた。また、学生同士で意見交換する場を設けることで、学生の理解と関心を深めることができた。授業後に質問がある場合は、Google Classroomを活用してやり取りを行うようにした。

例年どおり、前期・後期共に、授業内で期末課題のプレゼンテーションを行う機会を設けた。調査内容を整理し発表するとともに、他学生の発表を聞くことで、いろいろな視点から芸術文化政策について考察することができた。また、自身の出身地域の事例や関心のある事例をとりあげることにより積極的に授業に取り組む姿勢がみられた。今年度は特に、地域の文化財や文化資源を活用したまちづくりについて調査し、プレゼンテーションをする学生が多かった。文化政策についての知見を深めるだけでなく、特定の事例についていろいろな観点から調査し考察することは、次年度の卒業論文のテーマを検討する上でも参考になっていると感じた。

(赤木)

「コンピュータ音楽実習Ⅰ、Ⅱ」

担当教員：安田寿之

■ 概要

一般的な Digital Audio Workstation アプリケーションの一つ「Pro Tools」を使用し、アイデアを具現化し目標とする楽曲形態に到達する制作フローを習得する内容で、ソフトウェアを活用した作編曲技術の習得のみならず、個別の特性に応じた自発的な目標設定、21世紀型スキル（創造力、イノベーション、情報リテラシー、問題解決能力、協働力など）の獲得もテーマ／目標としている。コンピュータやソフトウェアで何ができるのかを理解することは必要だが、コマンドを暗記するようなことは求めている。むしろ、音楽を通して社会的スキルを身に付けることを重視している。作編曲に創造力やイノベーションが必要なことは言うまでもなく、情報リテラシーにより独自性を追求し、問題解決能力によって課題を打破するとともに同級生と協働し助け合うなど、音楽制作を通して問いに溢れる現代を生きる力を養えると考えている。

具体的には、制作ロードマップ（工程表）に則り、進行している。前期のコンピュータ音楽実習Ⅰでは、デジタルオーディオやソフトウェアの解説をするとともに、全員共通で編曲を進める1曲を決定する。ある程度スタンダードとして定着していて多様なアレンジが想定できるか、難易度はどうか、などの観点で選定する。今年度は20世紀後半の歌謡曲を好む学生がおり、その学生から多数候補曲が出た結果、荒井由実「ひこうき雲」が選定された。曲を決定後、各自、曲全体の構成、テンポ、拍子、スウィング感、キー、コードなどの基本要素を設定し、MIDIプログラムを進める。

後期のコンピュータ音楽実習Ⅱでは、各自1つの楽器をスタジオで録音する工程からスタートし、それらを編集し、前期制作したMIDIプログラムと組み合わせていく。スタジオでの録音は2人ペアで行い、演奏する側と録音する側をそれぞれ担当させる。録音する側はただソフトウェアを操作するだけでなく、演奏を客観的にきき、奏者がどうすれば円滑に演奏できるか考え指示するコミュニケーション力を求めている。録音がプログラムしていたアレンジに影響することも多々あり、編曲のアップデートとミックスを行い完成させる。

模範の意味ではなく、毎年私自身も学生と同じ条件でアレンジを行っている。制作途中での問題や壁をどう乗り越えるかを体現し、具体的な解決策を提示するためである。例えば、直接音には関係しないと思われがちな「整理」が音楽制作においていかに大切で、引いては実際の音に影響する、というようなことを教示している。結果的に、完成曲が学生への刺激になっていれば幸いである。また、近年のAIの音楽制作への影響は凄まじく、完成している楽曲から楽器ごとに分離するAI技術を使い元曲から歌だけを抜き出す紹介なども行った。

[前期：コンピュータ音楽実習Ⅰ]

曲構想

曲全体の構成、テンポ、拍子、スウィング感、キー、コードなどの基本要素を構想/設定



MIDI プログラム

- ・リズム MIDI プログラム→audio 化 (コミット)
- ・ベース MIDI プログラム→audio 化 (コミット)
- ・その他アレンジ楽器 (コード、装飾音など) MIDI プログラム→audio 化 (コミット)

後期レコーディングする楽器を想定し、その楽器は仮プログラムしておくか (レコーディング後、差し替え)、MIDI プログラムでは避けておく。



[後期：コンピュータ音楽実習Ⅱ]

生楽器 (基本的には1 楽器) 録音・編集

- ・夏休みの間に、楽器決め、アレンジ、練習しておく。(スムーズにレコーディングするため)
- ・スタジオにてレコーディング
ピアノ、ヴォーカルなどなら、そのまま録音。
管楽器、弦楽器、パーカッションなどなら、持参し録音。
- ・編集 (テイク選び、クロスフェード、ノイズ除去、スライス、クオンタイズ (タイミング修正) など)



ミックス

- ・エフェクト (EQ/コンプレッサー (必須)、空間系/歪み系/モジュレーション系など (任意))
- ・ミックスダウン (パン、オートメーション、バランス決め)
- ・ (マスタリング)



リミックス

部分的もしくは全く違う曲に改変、リアレンジ

■ 2024 年度総括

コロナ禍以降、今年度は初めてそれ以前と同じ環境で行った。ただ、感染対策の注意は初回に行い、私自身も講義の前後に手洗い、消毒、うがいを徹底した。

個々の能力や資質に応じて教えるレッスンの性質が濃い実習のため、人数が多くなると 1 人にかけられるリソースが減るが、今年度は 8 名 (残念なことに、1 名は後期休学) で妥当な配分はできた。それでも、休みがちで個別に説明する必要の出る学生、必須項目をこなしていない学生などへの対応で時間を取られ、ここ数年通り学生作品を持ち帰り自宅でしっかりきき講評する必要に迫られ

た。均等に個別対応を割り振ると不合格になる学生も出るため、優秀な学生により高度なことを教えられないジレンマも毎年のものである。データのコピーや講評する作業は相応の時間を要するが無給であり、苦しいところでもある。以前は講義時間内でできていたことができなくなっている理由は様々だが、進め方を変える必要を感じる。

今年度の課題曲、荒井由実「ひこうき雲」は現代に繋がる J-POP の源流の 1 つと言える楽曲だが、若い死をテーマにした歌詞と明るい雰囲気とのギャップはインパクトがあり、ストーリー性のある含蓄のある編曲を行う学生も多かった。

他学科、他コースの講義も担当しており否応なしに比較してしまうが（他では欠席も多く、悪い受講態度（スマホ、居眠り）と課題への取り組み（課題未提出、連絡無視）が際立つ）、アートマネジメントコースの学生は概して素直でまじめで教えやすい。休みも少なくしっかり受講し課題もこなし、安心して進められている。欠席に関して伝えている内容（欠席すると、講師は別の週に個別に説明をすることになり、出席者に使われるはずの時間を奪う）をよく理解し、基本的なことだが大部分はしっかり出席をしている。これも一つの協働力である。このような学生の特性は毎年受け継がれており、今コースの先生がたの指導の賜だと感じる。

（安田）

「演劇論・演出論」

担当教員：酒井 美恵

「演劇論・演出論」は、アートマネジメント専攻の 4 年次生 5 名を対象にした前期のみの選択科目である。

まず前半は、演劇界に関する基礎知識を提供し、卒業後の就職活動に役立てることを目的とした。また、学生が演劇鑑賞を通じてストーリーの背景や登場人物の心理に対する想像力を養い、今後の人生において参考になるような戯曲や舞台を見分ける視点を身につけることを重視した。

初めに、公共劇場、民間劇場、興行会社、劇団、俳優マネジメント事務所など、主催公演の興行形態の違いによるマネジメント体制の相違について解説。

その後、学生の演劇鑑賞経験をヒアリングし、主要劇場や劇団主催公演を鑑賞する課題を出す。学生は、出演者だけでなく主催者のマネジメント体制やスタッフ構成、その役割に注目し、観劇レポートを作成してプレゼンテーションを行った。

具体的には、東京芸術劇場で上演されたゼレール作のフランス演劇「La Mere 母」「Le Fils 息子」を 3 名が、新国立劇場で上演されたケシロフスキ原作のポーランド演劇「デカローグ」を 2 名が観劇した。学生たちは観劇を通じて人間ドラマをライブで体感するストレートプレイの魅力を感じ、「思わず涙が出た」という感想をもらした。

次に、日本演劇の主要劇作家・演出家を中心に「日本演劇史概論」の講義を行う。続いて「西洋演劇史概論」では主要 8 か国の重要劇作家・演出家・劇場名を紹介。学生は各自関心のある国を選び、事前に提示した各国演劇史のキーワードをもとにリサーチレポートを提出し、プレゼンテーションを行う。これにより、海外の演劇事情や発展の違いについて体系的に学ぶ機会を提供した。

後半では、「演出家や舞台監督の仕事と役割、制作との関わり方」を解説。そして、学生たちが自主的に選んだサミュエル・ベケット作『ゴドーを待ちながら』の戯曲を取り

上げ、実際の戯曲朗読実習を行った。コロナ禍や卒業後の進路に対する不安や焦燥感を体験している学生たちにとって、不条理劇の世界は理解しやすかったようである。学生たちは登場人物と演出家の役割を分担し、チームワークよく台詞の意味や状況を確認しながら、繰り返し一幕を読み進めた。

「演劇が自分たちの人生を物語っていることを知った」「生きるということを初めて客観的に考えることができた」という感想や、「リーディング実習を通して、感情を言葉にのせて表現する楽しさを知った」という声が寄せられ、非常に励みになった。

半期という短い期間ではあったが、この授業を通じて、今後演劇に触れる機会が増え、学生たちの世界観や視野が広がることを心から願っている。

(酒井)



「舞踊概論Ⅰ・Ⅱ」

「舞踊概論Ⅰ」

担当教員：阿部 さとみ

今、現在の日本ではインバウンドによる外国人旅行者の増加に伴い、ショーアップされた伝統芸能が数多くみられる一方、見通しの立たない国立劇場の再開場の問題には国民の関心がほとんど向けられていない現状があります。それだけ伝統芸能が一般社会から遠い世界のものになって久しく、特に若い世代にはそれが顕著です。この授業では、一口に伝統芸能といっても、神楽・田楽、雅楽、能、狂言、文楽、歌舞伎、日本舞踊と多岐にわたり、それぞれの特徴と多様な舞踊の形式を持っていること、共通して持つ背景にある思想が今日まで繋がっていることなどを、画像や映像を多用しつつ学ぶ形式をとっています。音楽大学という点から、絶対音階ではない日本の音楽の特徴を、アートマネジメントコースということから、制作面などの裏側も少々紹介しました。

今期の授業も、少人数なことが有効に働き、活発な意見や質問がありました。この授業を履修する以前から伝統芸能に興味をもっていた学生もいたため、その前向きな姿勢から、例年より少し深掘りした内容も加えることができ、学生からは「新しい気づきがあった」等の反応や西洋の事象と伝統芸能を結び付けた優れたレポートの提出もあり、頼もしく思いました。

(阿部)

「舞踊概論Ⅱ」「舞台芸術概論」

担当教員：稲田奈緒美

秋学期の「舞踊概論Ⅱ」では、ヨーロッパで誕生したバレエの歴史から始め、20世紀以降のモダンダンスや現代のコンテンポラリーダンスまで、歴史を辿りながら多様な舞踊とそれが生まれた背景にある社会について、具体的な映像を見ながら講じます。

今年度の履修者は4名で、それぞれ興味関心は違いましたが、大変熱心に受講してくれました。4年生のみの少人数クラスであるためコミュニケーションがとりやすく、卒業論文や就職活動の経験から各自が視点をしっかり持っていたことから、自由に質問や意見を述べてくれました。単に舞踊を学ぶだけでなく、自身の専門であるアートマネジメント領域と結びつけて考えることができたようです。授業後半は、学生が企画運営する12月の公演準備や卒業論文などと重なり厳しいスケジュールでしたが、計画性をもって臨み、最後のプレゼンやレポートではそれぞれに優れた成果を見せてくれたことを、大変うれしく思っています。

オムニバスで担当している秋学期の「舞台芸術概論」では、同じ作品をオペラとバレエ、ダンスで見比べ、それぞれの表現の特徴を理解するという授業であり、学生も両者を比較しながら興味を広げました。履修者が60名の講義形式のため、授業に向かう姿勢や集中度には差がありましたが、最後のまとめとなる学期末レポートでは学習の成果を優れた視点で書いてくれた学生も多くいました。
(稲田)

6. その他

F D活動

F D (Faculty Development) とは、大学教員の教育能力向上を図る活動であり、公式には「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」*と定義されているものである。
(*中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申 平成17年1月)

今年度アートマネジメント部会としては下記の活動を行った。

《実施事項1》「アートマネジメントコース授業に関する課題」として部会所属教員へのアンケート調査の実施

目的：学生に学ぶ喜びと学修成果をあたえられる望ましい授業のあり方を探求し、各教員の授業改善を図っていくこと。

内容：アートマネジメントコース部会所属の全教員を対象に「アートマネジメントコース授業に関する課題」についてアンケート調査を実施した。今回の調査結果を共有し、大学が実施した「学生による授業評価アンケート」の調査結果とともに、部会において意見交換した。今年度は担当の授業内での学生の学習態度、課題提出等、留学生や多様な学生に対する関わり方、授業運営の向上にあたり取り組まれていることについて討議することとした。

日時：2月17日(月)15時～17時(小会議室1)

- 回答者：アートマネジメントコース部会所属教員
- 回答期間：1月17日～2月10日
- 回答方法：Google フォーム(記名)
- 調査対象：原則として、本部会所属教員

備考：「学生による授業評価アンケート」の検証と共に、今回の教員からのアンケート調査を実施し、双方向的に討議することによって授業における現状の把握が具体的に可能となった。また、教員個々の課題の共有や自己点検にも生かすことができた。

《実施事項2》卒業研究指導方法の検証

目的：音楽総合学科において卒業論文を課している3コースが共同で、卒業研究の進め方について学び、各コースの指導法の検証と改善に結び付けること。

内容：音楽学コース、音楽教育コース、アートマネジメントコースの3コース合同卒業研究発表会を開催した。

時期：令和7年3月23日（ブラームスホール）

備考：音楽総合学科3コースそれぞれの卒業研究の発表を聴くことによって、研究テーマの設定や研究成果等について、相互に理解を深めることができた。合同卒業研究発表会は、予定どおり3月のオープンキャンパスにおいて開催された。

武蔵野音楽大学 音楽総合学科 アートマネジメントコース

年間活動報告書 2024

発行 : 武蔵野音楽大学
音楽総合学科 アートマネジメントコース

編集 : 武蔵野音楽大学
音楽総合学科 アートマネジメントコース
教員及び担当学生

刊行日 : 2025年3月31日